

一一〇一二年度・学力検査問題【国語】

(高校第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は14ページで**一・二・三・四**の四題あります。開始の合図で必ず確認し、そろつていないう場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に數えます。

——線あうおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 せいこう雨読の生活。
2 きひん席で食事する。
3 事のしんぎを確かめる。
4 船が定期にしゅっぱんする。
5 ゴッホのありゆうにある絵。

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。なお、出典
は二〇二〇年十一月初版の本であり、文中における新型
コロナウイルスについての記述は当時のものです。

ここ10年程の間、学問の世界では「ポスト・ヒューマン」という概念
や言葉がキーワードになってきました。これは、近代＝人間中心
主義（ヒューマニズム）の時代が終わつたという時代認識を示して
います。

前近代が神中心の時代だったのに対し、近代は人間中心の時代で
ある。人間を世界の中心に据えたからこそ、「神をも畏れぬ」仕方で
自然に手を入れられるようになり、自然の法則を解明してそこに介入
する技術が飛躍的に発展してきました。その結果、私たちの日常生活
の有り様は、次々に激変してきたわけですが、多くの場合、これらの
変化は「便利で安全で快適になつた」ととらえられています。

こうして技術発展の万能性が信奉されるようになると、今度は世界
の中心を占めるのは人間ではなく科学技術である、ということになつ

てきます。こうした考え方の典型が、A.I.（人工知能）は人間を超えるといったような議論です。一部の論者によると、人間がやつてきた
さまざまな知的活動は、A.I.によってことごとくとつて代わられるの
だそうです。もう人間は「世界の中心」ではない——これが「ポスト・
ヒューマン」という言葉の核心にある考え方です。

しかし、「ポスト・ヒューマン」は同時に、極端なまでの「人間中心
主義（ヒューマニズム）」でもあるのです。なぜなら、科学技術をつくり
り出すのはもちろん人間なのですから、科学技術が万能だとすれば、
それは人間の万能性を意味するからです。

ただし、「ポスト・ヒューマン」を X と見るにせよ、

Y と見るにせよ、ひとつのこととは確実に言えると思います。

それは、「ポスト・ヒューマン」とは、「他者としての自然」が消滅し
た状況を指している、ということです。ここで言う「他者」とは、「自
分の思う通りにはどうしてもならない相手」というような意味だとと
りあえず了解してください。近代の人間中心主義は、自然の他者性を
どんどん縮減してきました。たとえ自然の成り立ちにわからないところ
があつても、それは「まだ」わからないにすぎない（＝いつか必ず
わかる）ものとしてとらえられるわけで、近代自然科学は自然の他者
性を原理的には消去しているわけです。

こうして、近代の始まりと同時に自然の他者性は原理的に縮減し始
めたわけですが、現代世界で起こった重要な変化は、人間の外界とし
ての自然だけでなく、私たちの内なる自然、つまり「自然としての人
間」に対する態度が変わつてきた、ということです。それは、自然物
としての人間に對して手を入れる技術が飛躍的に発展してきたことと

関係しています。臓器移植、遺伝子治療、遺伝子操作、脳科学による脳の操作等々、「生命の神秘」にかかる領域の操作可能性が大幅に高まってきたのです。

これらの新しい技術発展による人間の身体に対する操作可能性は、近代社会が約束事として合意してきた「人間とは何か」という定義とぶつかり、その定義によって支えられてきた社会的ルールを揺るがせ、倫理的な葛藤を生じさせることになります。

例えば、「人間には理性がある（ゆえに、善惡の判断ができる、したがって罪を犯したときには責任を問われる）」という定義は、脳科学の使い方次第で変更可能になります。あるいは、人間の生殖・出生は操作できないからこそ、一人一人の人間の人としての価値には区別をつけられず、したがってあらゆる人間に對して等しく人権が認められるべきだという考えが通用してきたと思われますが、遺伝子操作によつて生殖・出生に介入できるとなると、この考えが揺らいでくることにもなるはずです。どんな子供が生まれてくるかは偶然に委ねるほかないという意味で、生殖・出生はまさに強固な他者性を有していたはずなのです、それが消滅しつつあるのです。いずれのケースも、ある人々を「非人間」と認定して社会から排除する（あるいは生まれさせない）ような状況が生じてくる可能性を示唆しています。

総じて言えば、A-Iをめぐる狂騒、遺伝子テクノロジーをめぐる狂騒といった、喧伝※けんてんされてきた「外なる自然の征服」と「内なる自然の征服」のプロジェクトは、新技術によつて「より便利で安全で快適な暮らし」が可能になることを夢見させつつ、私たちの懐いてきた人間の定義をグラグラと搖るがせるがゆえに、漠然とした不安の感情を行

き渡らせてきたように思われます。

私の考えでは、新型コロナによる危機が吹き飛ばしたのは、こうした「人間の開発した技術は世界の謎を解明し尽くして、思うがままに自然を改变することができる」といった観念ではなかつたでしようか。繰り返しますが、感染症に対する人類の知識が限られていることには、驚きを禁じ得ません。新型コロナ危機に促されて、私も専門家が書いた本を読むなど感染症に関するにわか勉強を少々してみましたが、そこですぐにわかつたことは、「感染症というものはよくわからないものだ」ということでした。

人類が意図的な努力によつて撲滅できた感染症は天然痘ただ一つにすぎず、ペスト、エイズ、結核、エボラ等々の多様な感染症の問題は、画期的な薬やワクチンの開発によつてその被害を食い止めることができるようになつたものも多いとはいえ、根本的には何ら解決されていないのです。気が遠くなるほど長い歳月にわたつて、多くの優れた知性が時に自らの命を危険にさらしながら感染症の脅威と戦い、その正体を見極めようと努力を重ねてきたにもかかわらずいまにわからぬことだらけで、ある感染症の流行が収束した理由もよくわからぬものがほとんどなのです。 □ I □ 約100年前に起こつたインフルエンザのパンデミック、いわゆるスペイン風邪（1918～1920年）は、全世界で1700万人から5000万人もの命を奪つたと見られます。これが収まつたのも集団免疫の獲得によつてであらうということまではわかっていますが、なぜそのタイミングで、どのようにして収束したのか、またウイルスの起源も、いまだわかつて

いません。

そして、今回の新型コロナウイルスの登場です。いま世界中の専門家がこのウイルスの研究に取り組んでいます。なにせウイルスは次々と変異し、強毒化することもあります。ですから、対処として何が正解であるのかも一概には言えません。ロックダウンのために、欧米ではGDPが30%以上も下落しました。日本のGDPも30%近い下落をマークしました。

それほどまでに私たちは活動を縮小させて新型コロナウイルスに打ち克とうとしてきたわけですが、このやり方が正しかったのかどうかもよくわかりません。仮に新型コロナの致死率がそれほど上がらないならば、経済縮小のために自殺に追い込まれる人が多くなってしまふかもしれません。もしもそうならば、活動の縮小などしない方が正解だったということになります（現にスウェーデンはそのような判断を下して実行しています）。ですが、私たちは、あまりにもわからぬことが多すぎて、「仮に」とか「もしも」とかいふたかたちでしか考えられないのです。また、致死率を予測することもできなければ、ロツクダウンがもたらす経済的苦境による自殺者の数も予測困難です。^{*2}いわんや、それらを比較することなどできるはずがありません。後遺症の重症度や発生率もまだわかつていません。安全なワクチンができるかどうかも、まだわかりません。本当にわからないこと尽くしです。³こうした現実は、「私たちは自然を征服した」という「ポスト・ヒューマン」の観念を吹き飛ばすに十分なものではないでしようか。A.I.が人間の思考を無用のものとする日を想像するよりも、ウイルスの変異メカニズムや、新型コロナウイルスをきわめて危険な感染症としている

る理由であるところの人間^{*3}の免疫系の過剰反応（サイトカインストーム）の発生メカニズムを解明することの方が、はるかに重大な課題であることは言うまでもないでしょう。

もつと言えば、新型コロナによる危機が訪れる前、私たちはなぜ、「科学技术による自然の征服」という妄想にとり憑かれていたのか、立ち止まって考えてみるべきではないでしょうか。私たちはいま、常識に引き戻されたのです。

技術の発展は社会の在り方をどんどん変えてゆく、すなわち社会の在り方はその社会の持つ技術によって決定される、という考え方は「技術決定論」と呼ばれます。新聞記事などでよく見かける「A.I.の進化によって社会は激変する！」といった考えは、典型的な技術決定論です。技術決定論は、技術を独立変数として設定し、社会の在り方をその関数としてとらえます。そして、技術は進化し続けるものと想定されます。ですから、「ポスト・ヒューマン」の観念も技術決定論の一種、そのかなり極端なヴァージョンであると言えるでしょう。技術は進化し続けて、人間に成り代わって世界の中心になると言うのですから。

□ II □、この考え方は真実ではありません。なぜなら、社会はその時々に利用可能な技術をすべて利用するわけではないからです。例えば、日本の江戸時代には、正確に時を刻むことのできる時計がすでにありました。しかしそれは広く使われることはなく、好事家の珍しい玩具として流通ただけでした。なぜなら、江戸時代の人々は、正確な時間を知る必要のある生活を送つていなかつたからです。工業社会化しない限り、分単位の正確な時間を知ることなど全く必要ではないのです。

用いられないかを決めているのは、その社会の在り方なのです。このことは、技術の発展にも当たります。どんな技術が盛んに発展し、どんな技術が発展しないのかを決めているのは、技術そのものではなくて、その技術を利用する社会の在り方なのです。⁴ 技術決定論の主張とは逆に、社会の在り方が独立変数であり、技術はその関数なのです。

(内田 樹編著『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』晶文社所収
白井 聰「技術と社会」より)

※1 喧伝：世間に広く知らせること。

※2 いわんや：もちろん。言うまでもなく。

※3 免疫系：生体内にある、病気から体を守るシステム。

※4 好事家：変わったことに興味を持つ人。物好き。

問一 I Ⅲ に当てはまる言葉として適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を一度使ってはいけません。)

A しかし
ウ つまり
エ 例えば

オ おそらく
カ また

問二 ————— 線1 「『ポスト・ヒューマン』という概念・言葉」とあります

りますが、これについて述べたものとして最も適当なものを次の
中から選び、記号で答えなさい。

ア 世界の中心は科学技術であると見なすものとして、人類が A I (人工知能) の支配下に置かれている状況から生まれた概念だが、科学技術を生んだ人間の万能性を根拠に、この認識が誤りだとする指摘も存在する。

イ 人間が世界の中心ではなくなったことを示す言葉だが、現代人が科学技術によってあらゆる問題を解決してきたという事実に着目すれば、科学技術中心の世界は人間中心の世界に他ならないという反論が成り立つ。

ウ 人間中心主義の時代の終わりを示すものとして、科学技術の発展を背景に登場した言葉だが、科学技術の源は人間の知性にあるという観点から、依然として世界の中心にあるのは人間だと見ることも可能である。

エ 世界の中心にあるのは人間が生み出した科学技術だという概念だが、近年、人間の万能性を証明しようとすることによって、人類に対する科学技術の優位性が明らかになってしまふという事態が生じていて。

問三 X Y に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の 中から選び、記号で答えなさい。

ア X=近代の人間中心主義
イ X=真の人間中心主義

ウ X=倫理的人間中心主義
エ X=脱人間中心主義

Y=現代の人間中心主義
Y=極端な人間中心主義
Y=非人間中心主義
Y=究極の人間中心主義

Y=究極の人間中心主義

問四 線2 「私たちの内なる自然（）変わってきた」とあります
すが、筆者の考え方を踏まえつつ、その具体例として最も適当なもの

のを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 技術の発展によって臓器移植が可能になつたことで、人間の死のあり方や、臓器を移植する者と移植される者との尊厳について問い合わせがなされたことをきっかけに、生命の尊さを強調する近代の人間観が再評価されてきたこと。

イ 近代の始まりとともに、脳科学が飛躍的に発展したことから、このままでは第三者による善惡の判断や責任能力が操作可能になるのではないかという懸念が強まり、技術の進歩が及ぼす悪影響について警鐘が鳴らされてきたこと。

ウ 人工授精によつて生命を誕生させることができ可能となつたことで、生殖における偶然性についての捉え直しが起つて、今日に至るまで普遍的なものとみなされてきた人間の定義に対する懷疑的な見方が生まれてきたこと。

エ 遺伝子操作の技術が一般化し、遺伝子組み換え食品が世界的な規模で流通する今もなお、それを食べることによる人体への悪影響など、食の安全を危惧する声が上がり、「自然とは何か」という議論が繰り返し行われてきたこと。

問六 線4 「技術決定論（）関数なのです」とありますが、ど

のようなことですか。その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 一見、ある技術が発達し、社会を変容させているように見えることがあるが、実際には、社会がその技術を必要なものとして意味づけ、発展させるのだと捉えるべきだということ。

イ 近代以降、社会は利用可能な技術をすべて利用することによって、技術も進歩を促されたという側面もあるということ。

ウ 社会全体が新たな時代に向かう中で、ある技術を必要とすることがあるが、それは技術が社会を根底から変革する力を潜むことがあることの、何よりの証であるということ。

エ 技術を限りなく進化するものと捉える近代の価値観は誤りではあるが、結果として、技術が近代以降の社会のあり方を常に変えてきたことは、紛れもない事実であるということ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「被災地に、絵を？」

「そう」

「絆つて、なんなんですかね。テレビもそればっかりじゃないですか」「支え合うってこと、つていうか」

「本当に大変な思いをした人に、ちょっと電気が止まつたくらいのわ
たしが『応援』なんて、なにをすればいいのかわかんないですよ」

「そうだね、むずかしい。でも絵を描ける伊智花だからこそ、絵の力
を信じている伊智花だからこそできることがあるんじやないか、つて、
わたしは思つたりもするのよ」

いた。

七月のある日、^{*}顧問のみかちゃんが一枚のプリントを持ってきた。

「やる気、ある？」

みかちゃんは、懇願のような謝罪のような何とも複雑な表情をして
いた。そのプリントには〈☆絵画で被災地に届けよう、絆のメッセー
ジ♪ → がんばろう岩手♪〉と書いてある。

「これは」

「描いた方がいいですか」

「描いた方が、いろいろと、いいと思う、かな」

1
それから私は不動の滝の絵を描きながら、〈心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向きなもの、つて、連盟の人は言つてた

「じゃあ、何を描けば」

「鳥とか、空とか、花とか、心が安らぐような、夢を抱けるような、

虹や、双葉が芽吹くようなものは、いくらなんでも「希望っぽすぎる」

と思つてやめた。そもそも、内陸でほとんど被害を受けていない私が

何を描くのもとても失礼な気がした。考えて、考えて、結局締切ぎり
ぎりになつて、通学の道中にあるニセアカシアは、毎年本当に雪のように降る。あまりの花の多さに、花が降るたびに顔をあげてしまう。顔をあげるから
前向きな絵、と思ったが、花が散るのは不謹慎だろうか、と描きなが

ら思つて、まぶしい光の線を書き足し、タイトルを「顔をあげて」と
だつて」

「県民会館で飾つて貰えるらしいし、画集にして被災地にも送るん
だつて」

した。みかちゃんは「これは、すごいわ」と言つてその絵を出展した。

私の絵は集められた絵画の作品集の表紙になつた。その作品集が被災地に届けられ、県民会館で作品展が開かれるとなつたら新聞社が学校まで取材に来た。

「〈顔をあげて〉このタイトルに込めた思いはなんですか？」

と、若い女性の記者はまぶしい笑顔で言う。あ。絵じゃないんだ。

と思った。枝葉の^{※2}ディテールや、影の描き方や、見上げるような構図のことじやないんだ。時間がない中で、結構頑張つて描いたのにな。取材に緊張してこわばるからだから、力がすいと抜けていく感覚がした。この人たちは、絵ではなくて、被災地に向けてメッセージを届けようとする高校生によるこんでいるんだ。そう思つたら胃の底がぐつと低くなつて、からだにずつしりとした重力がかかつっているような気がしてきた。記者はいますぐ走り書きができるようにペンを構えて、期待を湛^{たた}えてこちらを見ている。

「申し訳ない、というきもちです。わたしはすこしライフラインが止まつたくらいで、たくさんのものを失つた人に對して、絆なんて、がんばろうなんて、言えないです」

記者は「ンなるほど」と言つてから、しばらくペンを親指の腹と人差し指の腹でくにくに触り、それから表紙の絵を掲げるようにして見て、言った。

「うーん。でも、この絵を見ると元気が湧いてきて、明るい気持ちになつて、頑張ろうって思えると思うんですよ。この絵を見た人にどんな思いを届けたいですか？」

「そういうふうに、思つてもらえたなら、うれしいですけど」

私は、早く終わつてほしい、と、そればかり考えていた。描かなければよかつたと、そう思つた。²そのあと、沿岸での思い出はあるか、将来は画家になりたいのかどうかなど聞かれて、私はそのほとんどを

「いえ、とくに」と答えた。そばにいたみかちゃんは手元のファイルに目線を落として、私のほうを見ようとななかつた。記者が来週までには掲載されますので、と言いながら帰つて行つて、私は、みかちゃんとふたりになつた。深く息を吐き、吸い、「描かなければよかつたです」と、まさに言おうとしたそのとき、

「このさ、見上げるような構図。木のてつぺんから地面まで平等に、花が降つているところがすごい迫力なんだよね。光の線も、やりすぎじゃないのにちゃんと光として見える、控えめなのに力強くてさ。伊智花の絵はすごいよ。すごい」

と、みかちゃんはしみじみ言った。

「そう、なんですよ。がんばりました」

と答えて、それが涙声になつていて分かつて、お手洗いへ駆け込んで泣いた。悔しいよりも、うれしいが來た。³私はこの絵を見た人に、そう言われたかったのだ。

それからの一ヵ月間、私は不動の滝の絵を力いっぱい描いた。同級生や親戚から「新聞見たよ」と連絡が来て、そのたびに私は滝の絵に没頭した。

〈この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになつて、頑張ろうつて思つてもらえたうれしいです。と、加藤伊智花（いちか）さん（盛岡大鵬高等学校三年）は笑顔を見せた。〉

と、その記事には書かれていた。ニセアカシアの絵のことを考えるとからだも頭も重くなるから、私は滝の絵に没頭した。光をはらんだ水しぶきに筆を重ねることに、それはほとばしる怒りであるような心地がした。流れろ。流れろ。念じるように水の動きを描き加える。⁴この心につかえる黒い靄^{あお}をすべて押し流すように、真つ白な光を、水を、描き足した。亡くなつた祖母のことや賞のことは、もはや頭になかつた。私は気持ちを真つ白に塗りなおすように、絵の前に向かつた。

描き終えて、キャンバスの前に仁王立ちする。深緑の森を真つ二つに割るように、強く美しい不動の滝が、目の前に現れていた。滝だった。私が今までに描いたすべての絵の中でいちばん力強い絵だった。⁴「怒濤」^{どとう}と名付けて、出展した。

高校生活最後のコンクールは昨年の優秀賞よりもワンランク下がつて、優良賞だった。私よりもどう見ても画力のある他校の一年生の描いた校舎の窓の絵や、着実に技術を伸ばした同学年の猫の絵が、上位に食い込んでいた。最優秀賞は、私と同じ岩手県の沿岸、大船渡市^{おおふなと}の女子生徒のものだつた。ごみごみとしてどす黒いがれきの下で、双葉が朝露を湛えて芽吹く絵だった。あまりにも作為的で、写実的とは言いくらいモチーフだった。色使いも、陰影と角材の黒の塗り分けが曖昧^{あいまい}で、朝露の水滴の光り方もかなり不自然。これが最優秀賞。そんなの可笑しいだろうと思つた。最優秀賞を受賞した生徒は高い位置にボニー・テールをして、肌がこんがり焼けていて、明るそうな人だつた。東京で行われた授賞式で、私は初めてその人の顔を見た。

「わたしはあの日、家と母を亡くしました。避難所でしばらく暮らしでいて思つたのは『絵を描きたい』という強い思いでした。いまはテニス部だし、しばらく描くことから離れていました。そんなわたしでも、絵を描いている間、わたしはわたしの内側にあるきもちと対話をすることができます。暗いがれきの中で泣いて、怒つて、悲しんでいたはずの、どこに向かえばよいかわからなくなつていたわたしは、それでも最後にこの双葉を、気が付いたら、描いていました。こんな榮誉ある賞をいただき、どうしていいのか……」

と、彼女は手元のメモをちらちら見ながら、押し出すようにとぎれに言つた。審査員席に並んでいる六十代くらいの女性は、ハンカチで目元を押さえていた。私も喉の奥がぐつとせりあがつてきて、熱くて苦しかつた。彼女の言葉には不動の滝を描いていた時の自分とどこか重なるものがある。それなのに、私は、それでも。ああ。やっぱ絵じゃないんだ。と思つた。審査されているのは純粹にこの作品ではなく、「この作品を描いた高校生」なのではないか。作品と作者の不遇を紐づけてその感動を評価に加点するならば「特別震災復興賞」という賞でも新設すればよかつたのに、とすら思つた。

「あのお、本当に、こういつた、ね、たいへんな、未曾有の、あのお、そういう、事が起きたわけですが。こういつた状況の中で、えー、筆を持つことを、うん。あきらめなかつた彼女に、審査員一同、希望のひかり、そして絵の持つ力を再認識しました」

と、審査員のひとりは言つた。その審査員は東京の高校の美術教師だつた。震災のことを「あのお、そういう、事が起きた」としか言えないような人が言う「希望のひかり」つて、いったい何なのだろう。

無冠の絵となつてしまつたものの、私は滝の絵をとても気に入つていた。返却された絵を改めて美術室に運び入れ、^{※7} イーゼルの上にのせる。水面に向かつて茂つている深緑色の木々。その闇を分かつような白い滝。目を閉じれば音が聞こえてくるような水しぶき。その絵の上流から下流まで三度なぞり、二歩下がつてもう一度眺めた。いい絵だ、と思つた。どうしてこれがあの絵に負けてしまつたのか、本当はまだ納得がいかなかつた。

お手洗いから戻ると、下校確認の巡回をしていた世界史の、たしか榎^{えのき}という名の教師がノックもせずに美術室に入つてきて、私の絵を見た。
「CGみてえな絵だな、これ、リアリティがよ。部員が描いたのか?」私は自分の絵だとというのが恥ずかしくて「そうみたいですね」と答えた。

「立派な絵だよな。ちょっとと、今このご時世で水がドーンっと押し寄せてきて、おまけにタイトルが『怒濤』ってのは、ちょっときつすぎるけど、俺は意外とこういう絵がすきなんだよ」榎はキャンバスの下につけていたキャプションの紙の「怒濤」という文字を、人差し指でちろちろちろと弄んでから、イオッシ! 早く帰れよな、と言つて、次の見回りへ行つた。

榎が出ていったあと、私はしばらくこの絵に近づくことができなかつた。五歩くらい離れた場所から絵を睨んでは、さつき榎が言つていた言葉を何度も頭の中で繰り返した。右足が自然に浮いて、地面に

ついて、それを繰り返す。大きな貧乏ゆすりをしている自分がいた。何度も足をあげ、おろす、あげ、おろす。指定靴のスニーカーの底のなるほどね。だから、だから私の滝の絵は賞を獲れなかつたってことね。私から私が剝^はがれていく感覺がした。あーあ、そういうことだった。だつた。でした。はい。なるほどね。なるほど、なの? 黙つてニセアカシアの絵を描けばよかつたんだろうか。心が安らぐような、夢を抱けるような、希望や絆があつて前向きなもの。鳥や、花や、空を、描けば。「この絵を見て元気が湧いたり、明るい気持ちになつて、頑張ろうつて思つてもらえたらうれしいです」
と、小さく声に出して言う。言つて、左足を下げて、助走をつけて絵に向かつて走る。迫力のある滝のしぶきに私が近づいていく。蹴⁷とばそう、と思つた。こんなもの、こんなものこんなもの! 私は思い切り右足を後ろに振り上げて、その反動を使つて勢いよく蹴つた。いや、蹴ろうとした。「んら!」と、声が出た。しかし私は絵を蹴ることができなかつた。咄嗟^{ひきさ}に的をはずらし、イーゼルを蹴つた。蹴り上げられたイーゼルの左の脚が動いてバランスが崩れ、キャンバスの滝がぐらり、と大きく揺れた。私は倒れ込もうとする滝へ駆け寄つた。両手でキャンバスの両端を支えて持ち上げると、イーゼルだけが鋭い音を響かせて床へ倒れた。

吹奏楽部の金管楽器が、ぱほおー、と、さつきから同じ音ばかりを出している。それがそういう練習だと知つても、間抜けなものだつた。夕方の美術室にひとりきり、私は私の滝を抱きしめていた。

(くどうれいん『氷柱の声』講談社所収「滝の絵(二〇一)」より)

※1 顧問のみかちゃん：美術部を担当する教員。

※2 ディテール：全体に対して、細かい部分。

※3 ライフライン：生活や生命を維持するための、水道・ガス・

電気などを指す。

※4 怒濤(どとう)：荒れ狂い、激しく打ち寄せる大波のこと。

※5 写実的とは言いにくいモチーフ：現実をありのままに表現したとは言えないような図柄。

※6 未曾有(みぞう)：これまでに一度もなかつたこと。非常にめずらしいこと。

※7 イーゼル：絵を描くときにキャンバスを固定するための台。

※8 CG：コンピューターグラフィックスの略。コンピューターによつて製作された画像。

問二 線2 「そのあと」と答えたとあります。この時の

「私」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 記者は絵ではなく、被災者を励まそうとする高校生に関心があるのだと気付き、そのことに違和感を覚えながらも、その場をやり過ごそうとしている。

イ 自分の思い通りの記事になるように質問の答えを誘導しようとする記者の態度に、いら立ちを募らせながらも、質問に本心を偽ることなく答えようとしている。

ウ 記者が、絵の技法に関する専門的なことや題材については何も質問してこないことに対して気分を害して、投げやりな返答ばかりしている。

ア 高校最後のコンクールに出展する絵に集中したい時期であ

るにも関わらず、同時に別の作品を描かなければならぬことを負担に感じたから。

イ 連盟の人の提案する題材はどれも自分が描きたいと思えるようなものではないのに、その題材で自分に絵を描かせようとする顧問に対し反感を覚えたから。

ウ 中学の時に賞を獲ったのは確かだが、高校三年生の今になつて、どうして自分がこの取り組みに推薦されたのか、理解できなかつたから。

エ 現在は震災前と変わらない生活をしている自分の描いた絵に、大きな被害を受けた人の心を癒したり、希望を抱かせたりする力があるとは思えなかつたから。

問三　——線3「私はこの絵を（）言われたかったのだ」とあります

すが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 絵を見た被災地の人々を元気づける力を持つた絵であると認めてほしかったのだということ。

イ コンクールに出展する絵を描きながらこの絵を描いた自分の努力を評価してほしかったのだということ。

ウ 作品集の表紙になるほどの絵を描いた自分の画力を認めてほしかったのだということ。

エ 作者やタイトルではなく、構図や技法など、絵そのものを評価してほしかったのだということ。

問四　——線4「この心につかえる（）描き足した」とありますが、

これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 同級生や親戚たちなど、多くの人から注目を集めることを重圧に感じており、そのような感情を押し殺して、絵を描くことに神経を集中させようとしている。

イ 周りの人々は、自分の絵ではなく記者が書いた言葉に注目しているように感じられ、そんな自分の考えを打ち消そうとして絵を描くことに打ち込んでいる。

ウ 自分の描いた絵をほめてもらいたいという気持ちを浅ましいものと考え、そのような気持ちを抑えて純粹に絵を描くことと向き合おうとしている。

問五　——線5「高校生活最後のコンクール」とあります

に対する「私」の気持ちを述べたものとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア コンクールに向けて、長い時間をかけて熱心に制作に取り組んできた自分に比べて、最優秀賞を受賞した人は、しばらく絵を描いていなかつことを知り、そんな人に自分が負けたことを悔しく思っている。

イ 優秀賞を受賞した絵も最優秀賞を受賞した絵も、どちらも自分より高い画力があると認められるが、最優秀賞を受賞した絵はメッセージ性に欠けており、なぜ自分の絵がこの絵に負けてしまったのか、納得できずにいる。

ウ 自分の絵よりも最優秀賞を受賞した絵が優れているとは思えなかつたが、受賞した人がスピーチで述べた言葉には、滝の絵を描いていた時の自分の思いと共通する部分もあると感じている。

エ 最優秀賞を受賞した人のスピーチから、その人と震災との関係を知り、作品自体の良し悪しよりも、その作者の境遇が審査に影響しているのではないだろうかという疑念を抱いている。

工 震災で傷付いた人々の苦しみや悲しみを完全に理解することはできないが、そういった人々が希望を得られるような前向きな気持ちを、絵に表現しようとしている。

オ 震災をテーマにした絵画コンクールであるにも関わらず、

震災がどのような被害をもたらしたのかを明確に言葉にできないような東京の大人が審査を行うことについて、違和感を持つている。

ア 榊は絵をほめてくれたものの、コンクールでは昨年よりも

問六

——線6「私から私が剥がれていく感覺がした」とあります
が、この時の「私」を説明したものとして最も適当なものを次の
中から選び、記号で答えなさい。

ア 榊とのやりとりで、津波によつて大きな被害を受けた人々

がいるのに、水が押し寄せるような滝を題材として選んだ自分

が無神経に感じられ、うろたえている。

イ 榊に自分の描いた絵をほめられ、賞を獲れなかつたことは

自分の画力の問題ではないと自信を取り戻し、安心して力が

抜けていくような感覚になつてゐる。

ウ 榊の言葉で、賞を獲れなかつたのは自分が選んだ滝という

題材のせいだと理解し、これまで信じていたものがなくなつ

ていくような無力感におそわれている。

エ 勝手に美術室に入り、作者が目の前にいることにも気付か

ずに絵について持論を述べて去つていった榊の無遠慮な振る舞いに対して、いらだちを抑えきれないでいる。

問七

——線7「蹴とばそう、と思った」・8「私は私の滝を抱きしめていた」とありますが、この間の「私」についての説明として最も適当なものを次の 中から選び、記号で答えなさい。

ア 榊は絵をほめてくれたものの、コンクールでは昨年よりも

下の賞だつたことを思い出し、悔しさを晴らすため絵を蹴と

ばそうとしたが、その気持ちを原動力にしてさらに技術を高め、周囲に自分の画力を認めさせようと思い直し、絵を抱きしめている。

イ これまで自分が真剣に絵に向き合つてきたことが馬鹿らしく感じられ、絵を壊してしまえばこんな気持ちになることもないだろうと思つて蹴ろうとしたが、必死に描いてきた作品

も自分自身の努力も否定しきれず、絵を抱きしめることで自分の複雑な感情を受け止めようとしている。

ウ 記者の質問やコンクールの審査基準など、腑に落ちないことをばかり続いたことに加え、榊の言葉にもいらだちを感じ、絵を描くことや絵そのものが嫌になつて絵を蹴ろうとしたが、一生懸命に描いた絵が壊れてしまふのはもつたいないと思いつ直し、絵を抱きしめている。

エ 自分が描きたいものではなく、周囲が求めるような題材を選ぶべきだったという後悔から絵を蹴り壊そうとしたが、絵そのものを評価してくれたみかちゃんや榊のことが頭をよぎり、あわてて絵を抱き留め、その人たちを大切にしようといふ思いを強くしている。

問題文〈甲〉・〈乙〉を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

なお、問題文〈乙〉については設問の都合上、送り仮名や返り点を省略した部分があります。

四

〈甲〉

漢朝に孝孫といふ者ありけり。年十三歳なりけるが、父、妻が詞に

※1 元啓：孝孫と呼ばれた者の名。〈乙〉では「原谷」とする。
※2 手輿：人や荷物を載せ、人力で担ぐ車。〈乙〉の「輦」もこれに同じ。

つきて、年たけたる親を山へ送つて捨てぬ。孝孫幼かりけれども心ある者にて、父を諫めけれども父用ゐず。元啓と二人、親を手輿に載せ

て山へ送りて捨てて帰る。元啓この輿を持ちて帰らんとす。父がいはく、「持ちて帰りて何かせん」と制してければ、「父の年たけたまひたらん時、持ちて捨てんため」と言ひけるに心づきて、我、父を捨てば、また我を学びて、我が捨てられんことを思ひて、また親を具して帰りて養ひけり。父を諫むる計りごと、まさに智恵深くこそ。

（『沙石集』卷第三）

〈乙〉

孝孫原谷者楚人也。其父不孝、常厭父

之不^レ死^ル時^二父^一作^レ輦^一入^レ父^二與^二原^一谷^二共^ニ担^テ棄^テ置^{キテ}

山中^ニ還^ル家[。]原^一谷^二走^リ還^カ、齋^日來^カ載^{セシ}祖^一父^二輦^上呵^{シテ}噴^{シテ}

云^フ、「何故其持來耶。」原^一谷^二答^{ハテ}云^フ、「人^ノ子^ハ老^父ヲ^ヲ棄^{シテ}」

棄^ル山^者也[。]我^ガ父^老時^ニ入^レ之^ヲ將^レ棄^{シテ}不²能^レ更^ム

作^ム爰^ニ父^思惟^シ之^ヲ更^ニ還^カ將^レ祖^父一^ヲ歸^リ家[。]還^カ為^ス

孝子

（『孝子伝』舟橋家本）

問――線 a 「制してければ」・ b 「心づきて」とあります、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 制してければ

ア 尋ねたところ

イ 止めたところ

ウ 忠告したところ
エ 押さえつけたところ

b 心づきて

ア 感心して

イ 思い悩んで

ウ 思い至つて

エ 恐ろしくなつて

問二 線1「呵嘆云」とあります。その主語として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 原谷の父

イ 原谷の母

ウ 原谷の祖父

エ 原谷

問三 線2「不能更作」は「更に作る能はず」と読みます。

これを参考にして、解答欄に返り点を付けなさい。

問四 線「父を諫むる計り」ととあります。その内容は問題文〈乙〉ではどに当たりますか。最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 常厭父之不^レ死

イ 作^レ輦入^レ父

ウ 齋^レ來^二載^二祖^一父^一輦^上

エ 更還^二將^一祖^一父^一歸^レ家

問六 元啓（＝原谷）は、なぜ「孝孫」と呼ばれたのですか。その理由として適当なものを次のなかから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 仲違いする親たちの間をうまく取り持つたから。

イ 親不幸な父の考え方を改めさせたから。

ウ 手輿（＝輦）を持ち帰り再利用したから。

エ 父の行動から将来取るべき行動を悟つたから。

オ 祖父の命が失われるのを防いだから。

問五 問題文〈甲〉・〈乙〉を比較するといくつかの相違点が見られます。その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 〈甲〉では「孝孫」の父が年老いた親を疎ましく思う気持ちから山へ捨てたとするのに対し、〈乙〉では父が妻に言わされたから捨てたとする点が異なる。

イ 〈甲〉では「孝孫」が帰宅後に手輿（＝輦）を山へ取りに行つて持ち帰ろうとしたのに対し、〈乙〉では山から帰る際に持ち帰っている点が異なる。

ウ 〈甲〉では「孝孫」が「父を捨てる時もこの手輿（＝輦）を使うために持ち帰る」と語るのに対し、〈乙〉では「新たに作れないから持ち帰る」と語る点が異なる。

エ 〈甲〉では父の誤った認識を改めさせた「孝孫」に注目しているのに対し、〈乙〉では命を軽んじるわが子をとがめる父に注目している点が異なる。

〔国語〕

解答用紙 (高校第一回)

問
五

問
二

問
一

問
三

問
四

II

III

④

せいこう

⑤

きひん

⑥

しんぎ

⑦

しゅつぱん

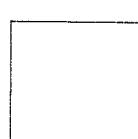
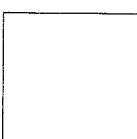
⑧

ありゆう

受験番号

氏名

得点



四

問

六

.

問

四

問

五

問

三

不 能 更 作

問

一

a

b

問
二

問

五

.

問

一

問
二

問

六

問

七

問

三

問

四

問

六